

主 題：目から梁を除きなさい

聖書箇所：ローマ人への手紙 2章1－4節

神を信じるのではなく、却って、神を拒み続けて罪の深みに沈んでいた人々にパウロは警告を与えました。その罪は必ずさばかれるという警告でした。パウロは繰り返して罪は必ずさばかるということはこの1章で教えてくれました。ところが、残念なことは、そのメッセージを聞いていながらそれを自分へのメッセージと受け取らない人々がいるということです。いつもメッセージが他人事になってしまっているのです。この2：17を見ると「もし、あなたが自分をユダヤ人ととなえ、…」と記されているわけで、当然、このローマにはたくさんのユダヤ人がいたのです。彼らのほとんどはこれらのメッセージを聞いた後、このように思ったでしょう。こんな罪を犯している罪人はさばかれて当然であると。しかし、その中には自分は含まれていないのです。なぜなら、ユダヤ人の多くは、自分たちは神によって選ばれた聖い尊い民である、神は私たちのことを喜んでくださっていると、そのように信じ込んでいたからです。私たちはユダヤ人だ、いったい、私たちをだれだと思うのか、あの罪深い異邦人とは違うのだと、ユダヤ人たちはこのように思っていました。神は地上のすべての国々の中でイスラエルのみを愛されたとそのように彼らは信じ、そのように教えていたのです。ですから、異邦人は神ののろいに会っても当然である、神を知らない彼らが滅んでも当然の報いであると、彼らはそのように思ったのです。もちろん、この手紙を読んだ異邦人の間にも、自分はこのような罪深い人ではない、彼らと違って聖い正しい人間だと、そのように思っていた人々がローマにはたくさんいたはずですが、どの時代にもそのような人々はいるからです。パウロはそのような人々のことを知っているのです。イエスがおられたとき、イエスはこのように言われました。「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに…」(ルカ18：9)と。イエスをご存じでした。私は正しい、私は聖い、私は神に喜ばれると言って、人々を見下し、人々をさばいている人たちはどの時代でも、どの地域にも、どの民族にも存在するのです。そこでパウロは、この2章からそのような人々に対して、自分は正しいのだ、このさばきは自分には無関係だと思い込んでいる人たちに対して、実は、あなたがたもさばきに向かっているのだということを教えようとするのです。自分は大丈夫だと思っているけれど、実は、さばきに向かっている人々に対して、パウロはこれからこの教えを与えて行こうとするのです。そしてパウロは、願わくは、このメッセージを聞く人々が自分自身の罪の自覚に目覚めることを願って語って行くのです。3：21からパウロは救いについて教えてくれます。それまではこのローマにいる異邦人やユダヤ人、もしかすると、その中には自称クリスチャンもいたでしょう。それらの自分は大丈夫だと思い込んでいる人々に、もう一度吟味して見なさい、そして、願わくは、救われていないのに救われていると思っている人々、罪が赦されていないのに赦されていると思っている人々に対して、罪の自覚を促すのです。

○他の人をさばく人の特徴 1節

2：1を見てください。「ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。」ここに二つの特徴を見ます。パウロが思い描いていたこの問題を抱えている人々の特徴です。

1. 彼らは人をさばく者でした。しかし、自分をさばこうとはしないのです。
2. 彼らはそのような人々と同じことをしている者たちであったということです。

この二つの特徴がパウロによって先ず記されているのです。その上で、パウロは1－5節でこのさばきの確実性を明らかにします。このようなことをしているあなたたちは必ずさばかれるというのです。

☆さばきの確実性 1－5節

○弁解の余地はない、必ずさばかれる

彼らは必ずさばかれる、そして、そのさばきに会うときだれひとりとして弁解はできない、なぜなら、あなたたちはこのようなことを行なっているからだ、二つの理由を上げています。

1. 意識的不従順 1－3節

(1) 罪だと分かっているが彼らはそれを行なっている。

知らないのではないのです。この中でこのように記されています。「他人をさばくことによって、…」と。なぜ、さばくのでしょうか？よく考えてみてください。さばくのはそれが正しくないということを知っているからです。だれかが何かをしている、例えば、盗人をさばくのは盗みが正しいことではない、それは罪だと信じているからです。人殺しをさばくのはそれが罪だと信じているからです。ということは、だれかがある人の行ないを罪だとさばいた場合、そのさばいた人はその行為が罪であると信じているこ

とを裏付けるのです。それが悪いと言うのならその人はそれが悪いと信じているのです。盗みが悪いと思っていない人は盗みを働いている人をさばくことはありません。パウロはこう言います。「ある人は他人をさばくことによって何が罪であるのかということをはっきりと明かにしていながら、そのさばいている罪を自分自身が行なっている」と、そのように彼らを責めるのです。先ず、私たちが気付かなければいけないことは、パウロはさばくことをとがめているではありません。パウロがとがめているのは、そのさばいていることをあなた自身がしているのではないかと、そのことです。その点を責めるのです。「**さばくあなたが、それと同じことを行なっている**」と。しかも、この「**同じことを行なっている**」というのは継続して行なっているという現在形です。一度行なったというわけではありません。それを継続して、繰り返して、習慣的に行ない続けているのです。想像できます。ある人々は人の罪を見てさばいているのです。それでいながら自分自身が同じことを継続して習慣的に行なっているのです。そのことを知っていたからパウロは彼らを責めるのです。ヴァインという言語学者は「この「**行なっている**」ということばは、常に、習慣的に行なっているという意味でパウロは使っている」と言います。ですから、「ただ何となく」、「たまに」ではなく、この人たちが行なっていたこと、その様子を伺い知ることができます。

また、彼らがしていたことは他人をさばくだけではありません。1節に「**自分自身を罪に定めています**」とあります。これは「有罪の判決を下す、罪を宣告する、罪に定める」という意味をもったことばです。パウロは、あなたたちのしていることは正しい、でも、それと同じことをしているあなたたちはそれと同じ基準をもってさばかれると言います。人々を有罪に定めているけれど、実は、それと同じことをしているあなたたちも有罪ですよ。ですから、先ず、この1節でパウロが言っていることは、このローマにいた人々の中に罪であると知っていながらそれを継続して行ない続けている人たちがいたということです。だから、あなたたちは意図的に不従順だと言うのです。知っていてそれでなお不従順な歩みをしていると言うのです。

(2) 罪に対する神のさばきが正しいことを知っているのにそれを行なっている。

2節に「**私たちは、そのようなことを行なっている人々に下す神のさばきが正しいことを知っています。**」とあります。「**私たちは**」と主語が変わりました。つまり、そのように罪を犯している人たちだけではなく、パウロも含めて私たちみな知っていると知っています。何を知っているのでしょうか？「**神のさばきが正しい**」ということを知っていると知っています。必ず、神の審判が下る、そのことはユダヤ人だけでなく異邦人も知っていると知っています。なぜなら、1：32でそのことを見たからです。「**彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっている…**」と、つまり、神はその人間の罪をさばかれるということを異邦人でも知っていると知っています。私たち日本人もそういうことばをよく使っています。原因と結果についてのことば、因果応報など、悪いことをすればその報いは必ず自分に返ってくると。イスラエルのユダヤ人だけが知っていたわけではありません。私たちもそのことは知っています。ですから、パウロはそのようなことはみな知っていると知っています。まして、異邦人ではなく、神のことばである聖書を学んだ者たちにはそれがより明らかだと言います。必ず、神はその罪をさばかれる、それは明らかだ、なぜなら、聖書を見るなら繰り返してそのことが神によって為されているからです。聖書の中には神のさばきがあふれています。神が罪をさばかれたことが繰り返されています。例えば、詩篇73篇、アサフというこの詩篇の著者がある疑問を抱きます。彼はレビ人でした。神の箱がダビデの町に持ち込まれるときに、彼は歌うたいとして選ばれるのです。そして、彼の子孫は神殿の礼拝における賛美の担当をするのです。このアサフが詩篇73篇で、私たちが抱くような疑問を抱いています。それは「なぜ、神は悪い人を放っておかれるのですか？なぜ、神さま、あなたに逆らい罪を犯している人々を放って置かれるのですか？」と、彼はそのことが疑問でした。彼は自分と、明らかに神の前に罪を犯している人たちの生活ぶりを見て、どうも自分よりも彼らの方が祝されているように思えて仕方がない、そのような疑問を抱くのです。3節「**それは、私が誇り高ぶる者をねたみ、悪者の栄えるのを見たからである。**」、4節「**彼らの死には、苦痛がなく、彼らのからだは、あぶらぎっているからだ。**」、11節「**こうして彼らは言う。「どうして神が知ろうか。いと高き方に知識があろうか。」**」、12節「**見よ。悪者とは、このようなものだ。彼らはいつまでも安らかで、富を増している。**」と、私たちはこれを聞いて「そうだ!」と思います。今の世でも同じことが起こっているからです。余りにも悪が横行している、なぜ、神は何もなさないのか？とそのような疑問をアサフは抱いたのです。私たちもそのように思うときがあります。しかし、特に、この17節から見て行くと、彼は大切なことを神によって悟って行くのです。「**：17 私は、神の聖所にはいり、ついに、彼らの最後を悟った。：18 まことに、あなたは彼らをすべりやすい所に置き、彼らを滅びに突き落とされます。：19 まことに、彼らは、またたくまに滅ぼされ、突然の恐怖で滅ぼし尽くされましよう。**」、27節「**それゆえ、見よ。あなたから遠く離れている者は滅びます。あなたはあなたに不誠実な者をみな滅ぼされます。**」、分かったのです、神が教えてくださったからです。心配しなくてもよい、必ず、神の審判が下ると言います。ある人たちはこの世の中の法の目をうまくくぐって、うまくやって楽しく

やって、そして、死んだら本望だと言います。とんでもないことです。その後には神の正しい審判が待っているのです。この地上だけではないのです。私たちは永遠に対する備えをしなければいけないのです。なぜなら、私たちは死んで終わらないからです。その後、ある者たちは神とともに過ごす、ある者たちは神から引き離されて、永遠をそのさばき、苦しみの中で過ごすのです。アサフよ、心配しなくてもよい、わたしは彼らが何をしているか知っているといます。私たちも思います、神さま、どうしてですか？…と。心配しなくてもよい、わたしは何をしているのか知っているとされます。少なくとも彼が学んだことは、そのように神に逆らっている人たちには必ず神の審判があるということです。

そのことはこのみことばが私たちに繰り返し教えてくれます。なぜ、イスラエルが捕囚を経験したのか？なぜ、彼らが滅びたのか？それは彼らの罪でした。そして、彼らとその罪を悔い改めたなら神はあわれんでくださる、でも、また罪を犯せば彼らを再び捕囚へと引き渡されます。そのことは私たちがこの聖書の中に何度も見て来ていることです。聖書を見るなら、私たちは確信を持ってこのように言うことができます。「神のさばきは必ず起こる、必ず、罪に対するさばきはある」と。しかも、そのさばきは正しいさばきであるとパウロは教えています。ローマ2：2に罪を行なっている人たちに対してのさばきがあるということを言って、その上、そのさばきは正しいと言います。「正しいさばき」、つまり、神の真実に従ったもの、神の前に公平なもの、神の真理に沿ったものであると言うのです。人間の裁判にはいろいろな不平不満が出て来ます。不完全な人間がさばくからです。しかし、神の審判に関してはだれからも不平不満は出て来ません。もちろん、不満を言う人はいるでしょう。でも、神の審判は正しい、なぜなら、神はすべてのことを知っているからです。この地上においては、この社会においては、人々がしたことが本当かどうか分かりません。いろいろな物的証拠によって何が真実であるかを探ろうとしますが、本当のことはわかりません。しかし、神は私の心を知っておられ、私たちの動機を知っておられ、私たちの思い、私たちの行為を知っておられます。だから、私たちはその神の前で何一つ言い逃れをすることはできないのです。「造られたもので、神の前で隠れおこせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」（ヘブル4：13）とこの著者は言っています。この真理は私たちに震えさせます。同時に、この真理は私たちに希望をもたらします。なぜなら、人が理解してくれなくても神は分かってくださっているからです。神はクリスチャンであるあなたの心の中をすべて見ておられます。あなたが神を愛して喜んで仕えていることを見ておられ、それに対して正しい報いをくださるのです。あなたがイエスを信じておられなければ、あなたのすべてのことを見ておられる神は、あなたがぐうの音も出ない完璧なさばきをもってあなたをさばかれます。なぜなら、神はすべての罪を知っておられるからです。

詩篇96：13で著者はこのように言っています。「確かに、主は来られる。確かに、地をさばくために来られる。主は、義をもって世界をさばき、その真実をもって国々の民をさばかれる。」と。ですから、パウロは言います、あなたに弁解の余地はないと。このように罪だと分かっているのに罪を犯している人々、その人たちに対するさばきは確実だと言います。そして、パウロは言います。その罪から離れなさいと。大丈夫だと思っているあなたに言います。目覚めなさい、大丈夫ではないからと。人をさばいていながら同じことをしているあなたに警告をするのです。

(3) 自分は神のさばきを免れると思っている。

パウロは3節でこのように言います。「そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。」と、この修辭的問い掛けに対する答えは明らかです。当然の答えは「NO」です。分かっているはずだ、神の前に正しくないこと、罪であることを知っていながら、それを行なっている人は、そのことを知らないで行なっている人よりもはるかにその罪が大きいと言うのです。バプテスマのヨハネは自分のところに来る人たちを見ていました。その中にパリサイ人、サドカイ人と呼ばれる人たちがいました。彼らは旧約聖書の教えをよく知っていました。確かに、知識はありましたが、悲しいことに、彼らの心は閉ざされていました。ですから、彼らがバプテスマを受けに来たとき、ヨハネはこのようなことを言いました。マタイの福音書3：7-8「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。」と、どうして、あなたたちが神のさばきを逃れると信じることができるのか、つまり、彼らは自分たちが教えていること、してはならないと教えていることを彼らは実際に行なっていたからです。だから、「**8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。**」と言うのです。神が何を望んでおられるのか、それを知っていながらそれを犯している、その罪に対して神は非常な怒りを覚えられると言うのです。だから、「私は大丈夫だ」と思っている人たちに対して、パウロはこのように警告するのです。

これが一つ目の、意識的な不従順、彼らはそれを繰り返していたのです。

2) 意識的拒絶 4-5節

二つ目に、彼らがさばかれる理由としてパウロが教えてくれることは意識的拒絶です。不従順だけで

ない、意識的に彼らは神を拒絶するのです。ですから、彼らの問題は意識的に神の恵みを拒んだということパウロは言うのです。だから、あなたたちはさばかれる、そのさばきに対して弁解の余地はないと言うのです。4節を見ると「**それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。**」とあります。救いのことを言います。神の恵みです。神の一方的な恵みによって、愛によって私たち信じる者に神は救いを与えてくださるのです。4節でパウロはこの救いについて、なぜ、これが神の恵みであるかということを教えています。三つのことに気付きます。一つ目は「**神の慈愛**」、二つ目は「**あなたを**」、そして、三つ目に「**悔い改めに導く**」と書かれています。神の救い、神の恵みのことです。

(1) **慈愛**：初めにパウロは「**神の慈愛が**」と言います。これは「情け深い、あわれみ深い」ということで、神はそのような方だと言うのです。確かに、神はすべての人に対して、このようにあわれみに満ち溢れた方です。ルカ6：35に「**ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。**」とあります。先ほど見た詩篇73篇にも出て来たように、なぜ、神はそのように神に逆らう人たちにもすばらしい恵みを与えられるのか、今日のこの清々しい日を楽しんでいるのは私たちだけではありません。イエスを信じておられない人たちもそれを楽しんでいます。なぜ、神はそこまで彼らにも同じような祝福を与えるのか、聖書は教えています。それが神であると。すべての人に対してこのように恵み深いお方であると。

しかし、この4節で言われている「**神の慈愛**」というのは、それ以上のものです。この「**慈愛**」ということばはおもしろいことばです。国語辞典を見ると「親がわが子を愛するようないつくしみの気持ち」とありますが、もちろん、私たちが分かっているのはそれ以上のものです。なぜなら、神が私たち罪人に対して示してくださった愛だからです。これは丁度、姦淫の現場で捕らえられた女を人々がイエス・キリストがところに連れてきたとき、そのときにイエスがこの女に示されたあわれみなのです。もちろん、彼らの動機は間違っていました。彼らはイエスに過ちを見出そうとしました。イエス・キリストを責める口実を見出そうとしたのです。だから、律法にはこのような女は石打ちにすると書いてあるけれどどうすればいいのかと問います。石打ちにするなら何と愛のない人よと、イエスを責めることができるし、愛するから赦してあげなさいと言うと、律法を無視する人だとイエスをさばくことができるのです。イエスが言われたことは「**あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。**」ということでした。人々は一人ずつその現場から離れて行ったと記されています。そのときに、イエスは最後に彼女にこのように言います。「**わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。**」と、ヨハネの福音書8章に出て来る話です。イエスはあわれみをもって、慈愛をもって、このひとりの女性に接するのです。まさに、罪人への神のあわれみです。ここで使われている「**慈愛**」とはそのような意味をもったことばです。神が罪人を愛してくださった、これが救いの核心であり救いの動機です。私たちの神による愛でも行ないによるのでもありません。神の一方的なご意志に基づくものです。もし、神が私たち罪人を愛することを拒否されていたとすると、救われるという祝福に与るチャンスは私たちには微塵もなかったのです。神があなたを愛するという、その選択をされなければ私たちは今この瞬間に、私たちにふさわしい永遠の地獄へと向かっているのです。罪のさばきへと向かっているのです。でも、神は私たちのことを私たち以上に知った上で、私たちがどんなに罪深いかを知った上で、どれほど神に逆らい続けて来たかを知った上で、神は私たちを愛してくださったのです。この神の慈愛がなければ私たちには救いの希望など微塵もなかったのです。パウロはそのことを教えてくれるのです。まず、神があなたを愛してくれたのです。あなたが何かをしたからではない、あなたが神を愛したからでもないのです。ヨハネはヨハネの手紙第一4：10でこのように言います。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。**」と。何もできないあなた、いや、神に逆らうことを継続しているあなたに対して、神はあわれみをもって接してくださったというのです。

(2) **あなたを**：「**神の慈愛があなたを**」と記されています。救いは個人的なものです。一人ひとりがしなければいけないことです。神の愛を受け入れるかどうかはあなたが決めなければいけないのです。神はあなたに働こうとしておられます。そして、あなたに働いてくださって、このような救いへと導いてくださったのです。よく皆さんがご存じのヨハネ3：16のみことば「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」、ぜひ、覚えていただきたいこと、今考えていただきたいことは「**御子を信じる者**」ということばです。すべて、信じる者は永遠のいのちをいただく、罪の赦しをもらうというのです。つまり、「信じる」という選択をしなければいけないのは私たち一人ひとりなのです。親が救われているからと言ってもその子どもが必ず救われるという保証はどこにもありません。伴侶が救われていても同じことです。

しかし、少なくとも、家族のだれかが信仰をもつことによって福音がその家庭に入って来ます。そして、だれであろうと神はあなた個人に語るのです。あなた個人に働くのです。そして、あなた個人が選択をしなければいけないのです。「それは御子を信じる者が」、「御子を信じる」すべての人がこの神の救いに与るのです。神は一人ひとりに働いておられます。あなたの心の中にも働いておられます。この中でイエスを信じている人、神はあなたの心に働いてくださったのです。60億以上の人間がいるこの世界の中であなたに働いてくださったのです。驚くべき奇蹟です。まだ、イエスを信じておられない人、神はあなたの心に働き続けているのです。

(3) 悔い改めに導く：「神が導く」と言います。これは「先頭に立って導く」というそのような意味をもったことばです。確かに、救いというのは神が主導権をもって私たちを導いて行ってくださいます。なぜなら、私たちは霊的に死んでいるから神のすばらしさも分からないし、神の真理も理解できない、そのような私たちのうちに神が働いて、そして、神の恵みによって私たちを救いへと導いてくださったのです。みことばは「悔い改めに導く」と言います。悔い改めのない救いは救いではないのです。天国に行きたいからイエスを信じますという悔い改めのない信仰は聖書の救いではありません。人間が考え出した方法なのです。なぜなら、その方が人々が信じ易いからです。人間が考えた愚かなこと、大きな罪は人間が神のメッセージに混ぜ物をして信じ易いメッセージに変えてしまったこと、信じ難いメッセージを除いてしまったことです。「罪を悔い改めなさい」というメッセージは人が信じ難いから…、とんでもないことです、それが神のメッセージなのです。しかも、神が働くならその人に悔い改めを与えるのです。だから、神がほめ称えられるのです。みことばを見るなら明らかです。神が愛してくださり、一人ひとりに働き、その人のうちに悔い改めをもたらすのです。それが救いです。神のわざです。

ペテロがコルネリオという異邦人のところに伝道に出掛けたとき、割礼を受けた人たちはその行為を非難しました。そのときに、ペテロはおもしろいことを言います。使徒の働き11章のところですか。ペテロがエルサレムに行ったとき、割礼を受けた人たちはペテロに「あなたは割礼のない人々のところに行つて、彼らといっしょに食事をした。」(11:3)、罪人と食事をしたと言ってペテロを責めたのです。それでペテロはいきさつを説明します。11章にそのことが記されています。そして、人々はそのことを聞いてこのように言います。18節「人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。」と言って、神をほめたたえた。」、人々はすごいことに気付くのです。神が働き、神がその人々に悔い改めを与えてくださった、このように救いへと導いてくださった、そのすばらしいみわざを見て、そのわざをなさった神をほめたたえたのです。私たち救われている一人ひとりはこの神の救いのみわざを覚えて、このようなすごいことを為してくださった神を称えることです。私のような者を神は一方的に愛してくださり、そして、私のような者に神は働いてくださり、何と、私が罪を悔い改めてイエスを信じるその信仰へと導いてくださった、だから、私たちは神を崇めるためにここにいるのです。神をほめたたえるために今ここに集まっているのです。そのことをあなたは知らないのですか？とパウロは言っています。知っているでしょう？こんなにすばらしい恵みがあることを！なぜ、あなたはその神に対して、その神の恵みを拒み続けるのか？なぜ、こんなにすばらしい祝福を与えようとしておられる神を拒み続けるのか？と、このようにパウロは彼らに対して訴えるのです。目覚めよ！目を覚ませ！どんなにすばらしい神であるかを思い出さない、知っているでしょう？その方の前に立ち返りなさい、その方はあなたの罪を赦してくださるからと。

皆さんにお勧めすることは、皆さん一人ひとりが神の前にご自身を吟味されることです。あなたがこうして救いを楽しんでおられるのは、あなたの為したわざではなかった、神の恵みでした。だから、私たちは神をほめたたえ、この恵みを宣べ伝えて行くのです。どうでしょう？あなたはその働きを忠実にしておられますか？心から救われた喜びに満たされて神を称え続けていますか？私たちが誇ることができるのはこのメッセージだけです。人々が聞かなければいけないメッセージはこのメッセージだけです。イエス・キリストだけが私たちを救ってくださるのです。このメッセージを携えて出て行くことです。このメッセージを与えてくださった神は、このメッセージを語る者としてあなたを使つてくださるのです。信仰者の皆さん、このメッセージを語るために出て行くことです。